

# 「正解」はないまず参加しよう



大阪大特任准教授

神里 達博

いつの頃からか我々の社会では、「不信」が常態化してしまっただ。とりわけ3・11後は、あらゆる社会システムへの失望を伴っており、集合的な心象風景の暗さは過去に例が無いほどだ。

けれども、恐らくこの不信の根には、一つの誤解がある。それは、どこかに唯一正しい答えがあるはずだ、という臆断である。行政やマスメディアへの不信には、正しい社会運営のやり方があるはずだ、という幻想が底流にある。また科学技術や経済への不信も、専門家は正しい処方箋を示す

ことができるはずだ、という過度な期待が背景にある。それらの裏返しとして「陰謀論」が流行する。

むろん、現状には改善すべき点が多々ある。だが、簡単に正解が分かるほど、世界は単純ではない。そこそこ20世紀に人類が学んだ最も大切な知恵だろう。そもそも近代とはいかなる時代なのか。

安直な議論は禁物だが、一つの整理の仕方として、「民主主義」と「専門知への依存」を二つの大きな柱と見なすことは、許されよう。そしてまさにこの二つが今、この国では大きく揺れている。

だがそれは、単に日本が立ち遅れているからではない。近代が本質的に抱えている矛盾が、この地で最も先鋭的に立ち現れていると考えるべきなのだ。

事実、9・11テロの6年前に地下鉄サリン事件を経験し、リーマン・ショックのはるか前にバブルが崩壊した。そして今、未曾有の強烈な高齢化社会に突入しようとしている。我が国は間違いなく

「課題先進国」なのである。

先達もなく、何が正しいかも分からないなか、それでも我々は明日を生きなくてはならない。しかしどうやって？ここで前景化してくるのが、「参加」というキーワードである。

「参加」は大きく二つの効果を持つ。まず自らが一時的・部分的にせよ、決定の当事者となることで、行政担当者や専門家などの「プロ」の判断の重さや苦悩を共に体験できる。

他方、「プロ」がその立場や権威を乱用していないかを監視する機能や、「プロ」に起こりがちな視野の狭まりを、「アマ」の常識によって補正することも期待できる。

これらを通じて、世界の複雑さを実感し、「唯一の正解幻想」から目覚め、民主主義や専門知のありようを進化させることができるのではなからうか。無論、この処方箋自体も、「唯一の正解」ではないのだが。